

音楽科におけるナショナル・アイデンティティとは何か —日本民謡教材の歴史的検討にむけて—

城 佳 世

九州女子大学人間科学部児童・幼児教育学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2023年6月26日受付、2023年8月3日受理)

要 旨

社会のグローバル化が進展する今日、多様な文化を理解し、尊重する態度の育成が求められている。多様な文化を理解するためには、自国の文化を理解し、愛着をもつことが必要である。自身が自国の文化に愛着を有しているからこそ、他者がもつ愛着を理解し、尊重することができるからである。自国の文化を共有すること、理解することは、ナショナル・アイデンティティ形成の源泉である。本研究の目的は、音楽科で育むナショナル・アイデンティティとは何かを究明する方法を提示することである。日本人としてのアイデンティティとは何か、また、ナショナル・アイデンティティの創出において伝統が果たす役割とは何か、論じるとともに、日本民謡をもちいてナショナル・アイデンティティの歴史的変遷を分析する方法を提案する。

キーワード：ナショナル・アイデンティティ、日本民謡、学習指導要領

1 はじめに

戦後日本、特に教育界においてナショナル・アイデンティティを論じることは忌避される傾向にあった。しかし、平成20年の教育基本法の改正、さらに『中学校学習指導要領解説（平成29年告示）音楽編』に「日本人としてのアイデンティティの確立」が明記されるなど、現在では避けることができない教育課題となっている。それに関わらず、教科教育において、具体の研究は現在でもほとんどおこなわれていない。本研究では、日本人としてのアイデンティティとは何か、また、ナショナル・アイデンティティの創出において伝統が果たす役割とは何か、を論じるとともに、日本民謡をもちいて音楽科におけるナショナル・アイデンティティの歴史的変遷を分析する方法を提案する。

さて、平成29年版学習指導要領の解説書である『中学校学習指導要領（平成29年告示）音楽編 解説』において、「自己及び日本人としてのアイデンティティ」（以下、引用を除き「アイデンティティ」に統一）という語が登場した。平成29年に改訂された学習指導要領の解説書のなかで、「アイデンティティ」の語がつかわれているのは、「中学校社会科」「中学校音楽」「中学校特別活動」の三つである。以下、それぞれの内容を示す。

【中学校社会科】第2章 社会科の目標及び内容

第2節 各分野の目標及び内容

1 地理的分野の目標 内容及び内容の取扱い「地域」

地球システムの中の異なる地域の構造と発展過程の理解は、人々の地域的、国家的アイデンティティ及び国際的立場を明らかにするための基礎となる。（文部科学省2018a, 34）

【中学校音楽科】第2章 音楽科の目標及び内容

第1節 音楽科の目標

1 教科の目標

グローバル化が益々進展するこれからの時代を生きる子供たちが、音楽を、人々の営みと共に生まれ、発展し、継承されてきた文化として捉え、我が国の音楽に愛着をもったり、我が国及び世界の様々な音楽文化

を尊重したりできるようになることも大切である。これらのことは、自己及び日本人としてのアイデンティティを確立することや、自分とは異なる文化的・歴史的背景をもつ音楽を大切に、多様性を理解することにつながる。このような意味において、音楽文化についての理解を深めることは、本来、音楽科の重要なねらいであり、教科として音楽を学習する音楽科の性格を明確にするものである。(文部科学省2018b, 12)

【中学校特別活動】 第2章 特別活動の目標

第2節 特別活動の基本的な性格と教育活動全体における意義

2 特別活動の教育活動全体における意義

(4)学級や学校の文化を創造する特別活動

特別活動の取組に照らすなら、特別活動の全ての活動は、学級・学校文化の創造に直接関わる活動と言えるのである。具体的には、各活動・学校行事やそれに関わる放課後や休み時間、地域等での準備等の活動を通して、教師と生徒及び生徒相互の理解や新たな人間関係構築、自己の再発見、後輩に引き継ぎたい学校固有の伝統や行事などを体験し、そこから自己や学級としての成長や生きる糧を実感するとともに、学校・学級生活の思い出やアイデンティティを確立するなど、生徒の人間形成に顕在的、潜在的に影響を及ぼす風土が培われ、多くの教育的な効果が期待できるのである。(文部科学省2018c, 29)

上記、記述を比較すると社会科及び特別活動と、音楽科ではそのあつかいに大きな違いがある。

社会科及び特別活動では、第2章第2節以降、すなわち、各教科等の学習内容に対して「アイデンティティ」の語がもちいられている。また、社会科では「国家的アイデンティティを明らかにするための基礎となる」との記述はあるが、「アイデンティティ」形成そのものが求められているわけではない。特別活動では、「アイデンティティを確立」という記述はあるが、学級、学校への帰属意識という意味でもちいられており、その範囲は限定的である。

これに対して、音楽科では第2章第1節、すなわち、音楽科そのものの目標に対して「アイデンティティ」の語がもちいられている。また、「自己及び日本人としてのアイデンティティ」の確立、及び多様な文化の理解も求められている。音楽科では他の教科や領域とは異なる次元で「日本人としてのアイデンティティ」の確立に関わることが示されていることがわかる。多様性を認める社会の実現において、音楽科の役割は大きい。

2 「日本人らしさ」の概念

本節では、音楽科で育む「日本人としてのアイデンティティ」を検討の前提として「日本人らしさ」の概念について整理する。そのうえで、なぜ日本民謡教材の分析を通して、ナショナル・アイデンティティの形成を検討できるのかを述べたい。

国民の形成において、文化は重要な役割を担っている。「日本人とはどのような人か」とたずねられたとき、われわれはどのように答えるだろうか。日本語を自由自在に操ることができる人々、着物・味噌汁・畳など、他国とは異なる独自の生活様式を有する人々、神社仏閣を敬慕する人々、正月に鏡餅を飾りお盆に先祖を供養する人々、花鳥風月や侘び寂びに美を感じる人々、などと答えるであろう。これらは、一般に「日本人らしさ」とよばれる文化的概念である。われわれは上記に述べたような文化的概念を共有、もしくは共通理解できる人々のことをさして「日本人」とよんでいる。「Aさんの考え方は日本人とはちょっとちがうよね。」というときの「日本人」も、同質の考え方を共有しているか否かを判断基準にしている言葉である。「箸を使う」「家のなかでは靴を脱ぐ」などの行動様式も、文化的概念にもとづいた作法である。また、「日本人の血」という意識も文化的概念である。本来、「日本人の血」という語に科学的根拠はない。「私には日本人の血が流れている」という意識は、想像上の文化的概念にすぎない¹。

これら「日本人らしさ」という文化的概念は変化しづらく、簡単に消えるものではない。これは、戦争等ならぬ理由で国家が機能不全に陥り、法体系や経済が機能しなくなったとしても、日本人という意識が失わ

れるわけではないこと、海外に移住しても日本人意識がなくなるわけではないこと、からも明らかである。

なお、国民とは、これら同質の文化的概念を有する集団を根拠とする政治的共同体である²。また、国民を統治するのが国家である。国家とは、法体系を整え、経済の統一を図るための中央集権的な機構や制度である。国家は国内法を制定し、国内法にもとづいて自由や権利を保障、共通の通貨を制定する。加えて、生産、分配、消費等の経済をつかさどることで、国内の統一性を保持する。そして、国民はこれら国家の統治に随順する。「われわれの国にはすばらしい憲法がある」「平等な選挙制度がととのえられている」「市民サービスが充実している」等の意識、「経済政策を見直してほしい」「福祉制度を充実させてほしい」等の意識は、いずれも国家への帰属意識のあらわれだといえよう。以上のように、国民意識、すなわちナショナル・アイデンティティは文化的概念と市民的概念によって構成されている³。

この市民的概念は、国家と個人との契約ともいいかえることができる。一方で、文化的概念に契約関係は存在しない。一人が複数のアイデンティティを所有することも可能である⁴。このような立場にもとづき、本研究であつかう文化ナショナリズムに、他国のアイデンティティを否定しようとする意図はないことをあらかじめ断っておきたい。

それでは、同質の文化的概念はどのようにしてつくられ、共有されるのだろうか。ナショナルな文化の共有には、大きく三つの段階がある。

- ① 共同体に属する人々による文化の創出
- ② 研究者、作家、芸術家等による文化の定式化・作品の創出
- ③ 国家やマスコミによるナショナルな文化の概念化と共有化

文化を創出するのは共同体に属する人々である。文化の核となる言語、風景、生活習慣、嗜好は、そこに住む人々が無意識のうちに作りだしたものである。これを、研究者、作家、芸術家等が、定式化したり、再現したり、再構成したりすることによって、論文や書籍、絵画、映像、音楽などの作品がうみだされる⁵。たとえば、公用語としての「日本語」は、明治期になって国語学者の大槻文彦が、日本の言語を整理し、辞書、文法を整え、日本初の近代的国語辞典である『言海』を編纂したことによって成立した。「日本の美術像」を確立したのは美術史家の岡倉天心である。日本文学を生み出したのは、夏目漱石、太宰治、川端康成などの作家である。現代において、代表的な日本文化とされるアニメをうみだしたのは、手塚治虫などの漫画家や宮崎駿などのアニメ作家である。

このように研究者、作家、芸術家等によってうみだされた論文、書籍、作品を「日本の文化」として、概念化したり、共有化したりするのが国家やマスコミである。

国家は国旗、国歌、記念建造物等を制定するとともに、国立大学を設けたり、図書館や博物館、劇場などを設置したりして、国の歴史、文化財、美術、音楽、芸能を通して、「日本像」や「日本人像」をかたちづくる。国家によって定義づけられた「日本像」「日本人像」は教育制度、具体的には教科書を通して、国民に共有される。なお、教育を通して「日本像」や「日本人像」が共有されるのは、第二次世界大戦終結以前に限ったことではない。現在においても日本の歴史、地理、文化財、伝統などは常に更新され、学校教育を通して「日本像」「日本人像」の確認がおこなわれている。たとえば、社会科では、日本はどのようなかたちをしているのか、日本の主権が及ぶ範囲、すなわち日本の領土はどこか、どのような産業があるのか、どのような歴史を有しているのかなどを学ぶ。国語科では言語のみならず、日本の文化や考え方も学ぶ。たとえば、教科書の定番である「ごんぎつね」には、古くからの日本の自然や生活、また贖罪をテーマとする日本人の考え方が折り込まれている。また、音楽科の必修教材である文部省唱歌〈ふるさと〉には、日本の里山の様子に加え、「志を果たして故郷に帰りたい」と願う日本人の考え方がうたい込まれている。その他、日本の伝統音楽にはどのようなものがあるのか、日本にはどのような楽器があるのか、日本人はどのような音を好むのか、好んできたのか、西洋音楽とはどのように違うのかなども学校教育を通して学ぶ。

また、マスコミも大きな役割を果たしている。新聞の国内ニュースの欄には、国家による政治、経済に加え、北は北海道から南は沖縄まで日本各地のニュースが紙面を賑わわせている。雑誌やラジオ、テレビ番組、

HPなどでも、たとえば、日本の風景や日本文化を紹介する番組が数多く紹介されている。また、小説や映画、テレビドラマには、日本人の仕事観、恋愛観、そして、喜び、悲しみなどの感情など、日本人の考え方や感性が反映されている。アニメも同じである。すなわち、人々は新聞や書籍、レコードやCD、そして、ラジオやテレビ、そしてインターネットなどのメディアを通して、「日本像」「日本人像」を共有する。その他、「うたごえ運動」のような、社会運動が関与してナショナル・アイデンティティが形成されることもある⁶。

すなわち、ナショナル・アイデンティティの核は必ずしもナショナリストがうみだすわけではない⁷。共同体に属する人々、そして研究者、作家、芸術家等に「日本像」及び「日本人像」を生み出そうとする意図があろうとなかろうと、国家やマスコミによって、ナショナル・アイデンティティは創出されることになる。その一例が、本研究であつかう民謡である。アメリカの南北戦争でうたわれた民謡、〈ヤンキードゥードゥル〉は、国家統合のシンボルとして機能してきた。昭和30年代から40年代にかけて大流行した日本の民謡酒場は、集団就職などで都会に就職した地方出身者の慰みとなり、高度経済成長期の下支えとなった⁸。民謡は庶民のうたであるからこそ、国民のアイデンティティとして機能したのである。

もともと、日本の芸能は、近世まで階級によって区別されていた。宮廷音楽として伝えられてきた雅楽、武士階級に保護された能楽、町人階級を中心に親しまれた歌舞伎や人形浄瑠璃の音楽、そして、農民階級を中心に愛好された民謡や民俗芸能がある。1873（明治6年）におけるこれら階級の身分構成は華士族・卒を含めた支配階級が6.4%，神官と僧が1.2%，農工商の平民が90.6%，エタ・非人が1.7%であった。また、そのうち、平民の割合は（明治6年15歳以降有業者割合）農 79.2% 工 3.5% 商 6.6% 雑 9.1% 雇人 1.6%であった⁹。つまり、農民階級が愛好した民謡は、大多数の日本人である庶民が共有していた文化なのである。

さて、教育において日本民謡は、明治期以降何らかのかたちであつかわれてきた。明治43（1910）年には文部省が民謡収集をおこない『俚謡集』を刊行している。明治44（1911）年から大正3（1914）年に発行された『尋常小学唱歌』においては、日本民謡が影響を与えたとされる〈茶摘み〉が掲載されている。昭和期においても多くの師範学校が民謡を収集するとともに民謡集を刊行している。また、昭和16（1941）年に文部省によって刊行された芸能科音楽の教科書『高等科音楽一』には〈麦打ち歌〉が掲載されている。そして第二次世界大戦終結後も、昭和33年版学習指導要領では鑑賞共通教材として〈江差追分〉が、昭和44年版中学校学習指導要領では歌唱共通教材として〈こきりこ節〉〈斉太郎節〉〈かりばし切歌〉が掲載され、必修教材として示されている。現在では日本人としてのアイデンティティを育む教材として学習指導要領解説書に示されている。

したがって、各時代においてあつかわれてきた日本民謡教材の分析をすることで、国家は何を子どもたちに理解させようとしてきたか、何をナショナル・アイデンティティとして共有させようとしてきたのか、その歴史の変遷を明らかにすることができる。

3 ナショナル・アイデンティティの形成と伝統

さて、ナショナル・アイデンティティの創出において、重要な役割を果たすのは「伝統」である。アントニー・D・スミスは、ナショナル・アイデンティティを「ナショナルな共同体の成員による、ネイション独自の伝統を構成する象徴、価値観、神話、記憶、しきたりなどに表された模範の継続的な再生産と再解釈であり、そのような伝統とその文化的要素による成員の可変的な自己確認である」（アントニー・D・スミス 2018, 48）と述べている。ナショナル・アイデンティティの創出に伝統を求めるのは、現在でも同じである。たとえば、日本の代表的な文化とされているアニメについて、小学校第六学年の国語の教科書には、日本アニメの祖を「鳥獣戯画」とする説明文が掲載されている¹⁰。

これらナショナルな伝統は、近代国家によって人工的に生成されたとする考え方もある。ホブスボームは、『創られた伝統』のなかで、新たな伝統を「旧来の伝統に容易に接木」「民間の伝承から借り入れて案出される」「現存する慣習的、伝統的慣行が新たな民族的な目的のために修正されている」と述べている。しかし、近代国家におけるナショナルな伝統が、人工的にのみつくられたものではない。

たとえば、2011（平成23）年におこった東日本大震災では、震災当日の夜、避難所で座布団とスリッパ

を使って獅子振りがおこなわれている¹¹。また、震災後には、生活がままならない状況であるにもかかわらず、多くの芸能や祭礼が、極めて早い時期に再開されている。芸能や祭礼は、震災前の生活を呼びおこし、震災前と震災後の橋渡しの役割をも果たした。すなわち、地域に古くから伝わる芸能が復興の原動力となっているのである。たしかに、国家は震災で失われた文化財の保護を積極的にすすめてはいる。しかし、これらの事例において、国家は自生的・自発的におこなわれている活動に手を貸して支援しているにすぎない。力強く国家が主導しても、それを実際に継承するヒト・モノ・コトがなければ、地域の芸能を復活させたり、継承させたりすることはできないのである。

別の例をみてみよう。写真1は、福岡県豊前市でおこなわれる豊前楽の神幸行列である。子どもの手元を見てもらいたい。演奏しているのは、リコーダーである。平安時代に農作物の豊作を祈ってはじめられたとされる豊前楽の笛が、最初からリコーダーであったはずはない¹²。

もともと豊前楽でもちいられていたのは横笛である。また、その伝承方法は口伝であった。しかし、時代を経て、横笛はリコーダーに変化した。同時に五線譜がつくられ、楽譜をみて子どもは演奏ができるようになった。すなわち、容易に継承ができるようになったのである。たしかに、豊前楽における笛は、現在では、見た目、音色、音程など、かつてとは



写真1 福岡県豊前市豊前楽（筆者撮影2018年4月）

大きく異なっている。しかし、だからといって豊前楽の伝統が損なわれていることにはならない。雨乞い神事、門付けをはじめとする信仰、振る舞い酒、直来などの習慣は、変化しながらも継続され、地域コミュニティの中核として機能している。そして、これを国家が文化財として保護することで、豊前楽はナショナルなアイデンティティとして認知される。国の文化財保護指定のお墨付きを得たいと考える民俗芸能は数多い。

民俗学者の岩竹美加子は伝統について、「一般的に過去と現在との間の文化的、社会的継続として理解されている。過去と現在の関係は、自然で滑らかに連なっているもののように普通は感じられてしまうのであるが、それは、実は、過去の中にある要素と現在のある要素とを関連づけて理解しようとする政治的意図や想像力の中に、構築されるのである。」(岩竹1996,25)と述べている。しかし、伝統とは単に目に見える、耳に聞こえる要素同士を政治的意図や想像力、すなわち、上からの力によってつなぎ合わせられたもののばかりではない。実際には目に見えない、耳に聞こえない、たとえば、神への信仰、集落の連帯意識、習慣、作法などを核としながら、作り手によって伝統は再生産、再解釈されているのである。

図1は筆者が伝統の継承がどのようにおこなわれるのか、その考え方を図であらわしたものである。

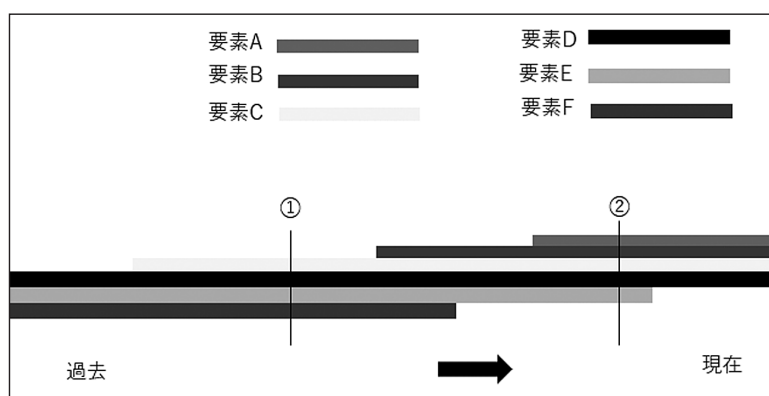


図1 伝統の継承図（筆者作成）

図では伝統の構成要素を、便宜的にABCDEFの6つで示した。A, Bは新たに加わった要素, Fは途中で消失した要素である。C, D, Eは比較的長く続いている要素である。当然ではあるが、伝統には長く続いている要素もあれば、消えゆく要素もある。伝統とは、目に見えないもの、目にみえるもの、耳に聞こえるもの、耳に聞こえないもの、これらいくつもの要素が組み合わせられながら、連綿とつながってきたのである。ある日突然、人為的につくられた文化ではない。

さて、日本の教育制度では、教科書を使用して教育をおこなうことが義務づけられている⁸⁾。その学習内容は国家がおこなう教科書検定によって担保される。したがって、教科書に掲載される教材には国家の意図が働くことになる。民謡には作者がいらない。そのため、教科書の作り手側の意図によって、掲載される音楽のテキストそのものが変化する。すなわち、国家の意図によって、AやBの要素が加わったり、Fのように消失したりすることになる。①②であらわされる断面が学校教育であつかわれる教材だと考えよう。①②を構成する要素は時期によって異なることになる。

つまり、教科書に掲載された民謡教材について、どのように歌うことが求められているのか、どのような楽器がつかわれているのか、どのような和声がつけられているのか、などを分析することで、時期によってどのような要素が加えられたのか、どのような要素が失われたのか、また変わらないものは何か、を考察できる。

4 日本民謡の分類案

本節では、今後、上記①②であらわされる断面を分析するために、便宜上、民謡を表1の三つに分類する案を提案する。

表1 日本民謡の分類案

分類名	背景	音の特徴
郷土指向型民謡	①仕事の場や、生活をともにする集落のなかでうたわれる。 ②うたうことを職業としない人がうたう。 ③口承で継承される。	伴奏をとみなわない。人によって、また、土地によって異なる歌詞や旋律、リズムでうたわれる。
大衆指向型民謡	①メディア、観光地、民謡大会等でうたわれる。 ②芸妓、民謡歌手、民謡愛好者等がうたう。 ③師匠による口承、必要に応じて楽譜を用いて継承される。	三味線や尺八などの伴奏を伴う。発声、コブシやゆれなど、独特のうたい方を強調してうたわれる。人々が同じ歌詞や旋律、リズムでうたうことができる。
西洋志向型民謡	①メディア、コンサート、学校等でうたわれる。 ②問わない。プロの歌手、アマチュアのうたい手、合唱団、児童生徒などさまざまな人々がうたう。 ③継承の意識は薄い。古くからの民謡に新たな魅力をついて継承しようとする姿勢はみられる。	西洋楽器で伴奏をしたり、合唱、合奏で演奏したりする。歌い方や演奏方法に決まりはなく、楽譜をもとに、誰もが同じ、歌詞や旋律、リズムでうたうことができる。

「郷土志向型民謡」は地域でうたいつがれてきた民謡、すなわちある地域に在住する人々が、そのコミュニティのなかで伝承、共有してきた民謡をさす。「それぞれの地域でごく普通の人々が昔から日常生活の中で仕事の時とかくつろいだ時、またお祝いの席とか祭りや盆の踊りの際などに折りにふれて歌ってきた本来の素朴な民謡の形」(小島1981, 9)である。

大衆志向型民謡はマスコミを通じて流行した民謡やツーリズムによって流行、すなわち大衆音楽として日本全国の人々が共有してきた民謡をさす。小島(1981)のいう「旅回りの民謡歌手や各地の民謡の名人たち」が「舞台上歌って聞き映えがするように洗練してきた歌」「東北出身の歌手が九州の民謡を歌い、大阪で津軽三味線がひじょうに盛んに演奏される」民謡である¹⁴⁾。「こぶし」や「ゆり」など、その歌い方にその特徴がある。

西洋志向型民謡とは、西洋音楽に日本民謡の要素、たとえば楽器や旋律、歌詞などをとりいれた新たな音

楽をさす。すなわち、「西洋音楽の語法を学んだ日本人作曲家たちがいかに『日本的』な作品を生みだすか」(葛西2015,10)にもとづく。日本音楽というよりも、西洋音楽のカテゴリに属する民謡である。

上記分類をもちいて、教科書の民謡教材を悉皆調査することで、国家が地方、国内、国外のいずれを重視して学校教育をすすめようとしたのか、地方文化、大衆文化、西洋文化をどのように、ナショナル・アイデンティティに組み込もうとしたのか、その時期的傾向を分析することが可能となる。

5 おわりに

「日本の音楽」は、国民に共有されることによってナショナル・アイデンティティとして機能する。教師は教育内容が、ナショナル・アイデンティティの確立と直結していることを理解しておくことが必要であろう。一方で、何をナショナル文化と考えるのかについても、十分に吟味しておく必要がある。たとえば、現実の日本には、いわゆる大和民族のみならず、アイヌや琉球王国、小笠原の欧米系住民が存在する。また、移民の問題などもある。今日、公教育であつかうナショナル文化には、これらも包含されていることが望まれる。

そして、現在の日本において「日本の音楽」というカテゴリが、ナショナル・アイデンティティとして十分に機能していないことも、また事実である。その理由として、日本の音楽の種目数が膨大であり多種多様にわたっていることがあげられる。たとえば「日本の食文化」であれば、ほとんどの日本人が「寿司」や「天ぷら」を思いつく。また「素材や旬を大事にする」等の説明もできる。しかし、「日本の音楽」といわれたときに、多くの人は具体的に説明することができない。もちろん、能や歌舞伎、雅楽など、日本には優れた伝統音楽が数多く存在する。しかし、これらは多くの人々にとって身近なものではなく、「歌舞伎をみたことがない」という人も少なくないのが現実である。日本人が理解、共有し愛着をもつことができる自国の音楽文化とは何かを再考する必要があるだろう。

多様な文化を理解するためには、自国の文化を理解するとともに愛着をもつことが必要である。自国の文化への愛着を理解できれば、他国がなぜ文化を尊重するのかについても理解できる。すなわち、多文化を尊重することができるのである。

今後は、日本民謡の三つの分類をもちいて日本民謡教材を分析し、国家が何をナショナル・アイデンティティとして位置づけたのか、その歴史的変遷を明らかにしたい。

〈付記〉本研究は日本学術振興会科学研究費(課題番号:22K02848)の助成を受けている。

引用・参考文献

- 相澤卓郎・佐久間政広(2017)「東日本大震災後における民俗芸能の復活—なぜ大曲浜獅子舞は年間45回も上演されたのか—」『社会学年報46』45-56東北社会学会
- 赤松啓介(1955)「近世民謡源流考」『書彩9』「書彩」発行所,〔赤松啓介(1994)『民謡・猥歌の民俗学』,明石書店,19-46に所収〕。
- 秋山龍英(1983)『民謡研究リーディングス』音楽之友社。
- 浅野建二(1966)『日本の民謡』岩波書店。
- アントニー・D・スミス,高柳先男訳(1998)『ナショナリズムの生命力』晶文社。
- アントニー・D・スミス,巢山靖司・高城和義・河野弥生・岡野内正・南野泰義・岡田新訳(1999)『ネーションとエスニシティ 歴史社会学的考察』名古屋大学出版会。
- アントニー・D・スミス,庄司信訳(2018)『ナショナリズムとは何か』ちくま学芸文庫。
- 岩竹美加子編訳(1996)『民俗学の政治性 アメリカ民俗学一〇〇年の省察から』未来社。
- エリック・ホブズボウム,テレンス・レンジャー,前川啓治,梶原景昭訳(1992)『創られた伝統』紀伊國屋。
- 葛西周(2015)「地域横断的な「国民楽派」の議論に向けて—日本における関連用語の混乱を例に—」『国民音楽の比較研究に向けて—音楽から地域を読み解く試み—』京都大学地域研究統合情報センター。

- 小島美子 (1967) 「読者への手引きー音楽学と日本の民謡・民俗芸能ー」『日本の民謡と民俗芸能』東洋音楽学会編, 11-43.
- 小島美子 (1975 「音楽についても疑問を持とう」『季刊音楽教育研究』17-7, 音楽之友社122-127.
- 小島美子 (1985) 「歌われる歌としての民謡」『口承文芸研究第4号』日本口承文芸学会9-18.
- 小谷竜介(2018) 「文化財化する地域文化ー大規模災害後の民俗文化財をめぐる対応からー」『震災後の地域文化と被災者の民俗誌』新泉社24-37.
- 小松和彦 (1999) 「総説 芸術と娯楽の民謡」『芸術と娯楽の民謡』雄山閣3-21.
- 品田悦一 (2019) 『万葉集の発明 新装版 国民国家と文化装置としての古典』新曜社.
- 関山直太郎 (1958) 『近世日本の人口構造ー徳川時代の人口調査と人口状態に関する研究』吉川弘文館.
- 施光恒・黒宮一太 (2009) 『ナショナリズムの政治学：規範理論への誘い』ナカニシヤ出版.
- 園部三郎・山住正巳 (1962) 『日本の子どもの歌』岩波書店.
- 高畑勲 (2012) 「『鳥獣戯画』を読む」『国語六』光村図書.
- 柘植元一 (1988) 「民俗音楽と民俗芸能」『季刊音楽教育研究55』音楽之友社84-88.
- ディビット・ミラー, 富沢克・長谷川一年・施光恒・竹島博之訳 (2007) 『ナショナリティについて』風行社.
- 文部科学省 (2018a) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 社会編 解説』東洋館出版社.
- 文部科学省 (2018b) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 音楽編 解説』教育芸術社.
- 文部科学省 (2018c) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 特別活動編 解説』東山書房.
- 豊前市教育委員会 (2019) 『豊前感応楽調査報告書』.
- 山路興造 (1999) 「『芸能』の機能と類型」『芸術と娯楽の民謡』雄山閣95-118.
- 山田耕筈 (1956) 『音楽 中学校用3』教育図書.
- 吉野耕作 (1997) 『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会.
- 渡辺裕 (2010) 『歌う国民ー唱歌, 校歌, うたごえ』中公新書.
- Matthew Riley, Anthony D. Smith (2016) *Nation and Classical Music: From Handel to Copland (Music in Society and Culture)* .

¹ 吉野1997, 146-147など。

² 施2009, iv参照。

³ アンソニー・D・スミス1998, 37など。

⁴ ディビット・ミラー 2007, 248参照。

⁵ 吉野耕作は文化ナショナリズムを、創造型文化ナショナリズムと再構築型文化ナショナリズムの二つに分類している。そして、「創造型ナショナリズムにおいて民族の独自性に関する考え方を体系化する際に中心的役割を担う知識人は、主に祖先の「歴史」(神話)と文化を探索する「歴史家」および芸術家(芸術研究者),特に詩人(詩歌研究者)である」とし、「再構築型文化ナショナリズムの典型である日本人論の主な関心は、日本人と外国人(西洋人)の行動・思考様式の差異の体系化,意識化を通して「我々」と「彼ら」のシンボリックな境界線を引くことにある」としている。

また、アントニー・スミスは「エスニックな復興の新しい原動力は、学者の歴史学的・哲学的・人類学的な研究によって、また詩人、音楽家・劇作家・画家の文学的・芸術的成果によって、生みだされる。」また、共同体をネイションとして再規定する鍵は、「考古学・歴史学・哲学・人類学・社会学などの学問分野によって開けられ、その輪郭は、小説・演劇・交響楽・オペラ・バレエ・「歴史」・風景画のような、「新しい」文化的・芸術的ジャンルにおいて、表現される。」(アントニー・スミス1986, 189)としている。

⁶ 渡辺裕2010参照。

⁷ Matthew Riley, Anthony D. Smith2016, 9

⁸ 三隅治夫1990, 渡辺裕2010参照。

⁹ 関山1958参照。

¹⁰ 高畑2012

¹¹ 小谷竜介2018,24-37

¹² 豊前市教育委員会2019

¹³ 日本の学校においては、明治期には検定教科書、明治、大正、昭和前期には国定教科書、第二次世界大戦終結後には、検定教科書がもちいられてきた。

¹⁴ 小島1981は「全国区民謡」とよんでいる。、

National Identity in Music Education : Toward a Historical Review of Japanese Folk Song Teaching Materials for Music Education

Kayo JO

Department of Early childhood and Elementary Education, Faculty of Humanities Kyushu Women's University
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi City Fukuoka, 807-8586, japan

Abstract

In today's globalized society, it is necessary to cultivate an attitude of understanding and respecting diverse cultures. In order to understand diverse cultures, it is necessary to understand and have attachment to one's own culture. It is only when one is attached to one's own culture that one can understand and respect the attachment of others. Sharing and understanding one's own culture is the source of national identity formation. The purpose of this study is to present a method to investigate what national identity is fostered in music education. We will discuss what Japanese identity is and what role tradition plays in the creation of national identity, and propose a method for analyzing the historical transition of national identity using Japanese folk songs.

Keywords: National Identity / Japanese Folk Songs / The Course of Study